

No.2719

中国古文書学の基礎研究：東アジア古文書学構築のために

東京大学大学院経済学研究科 講師

小島浩之

本共同研究は、東アジアの古文書学の基礎的・理論的枠組を確立するために、特に中国の古文書を対象に様式論と形態論の観点から検討するものである。

2016年度は上杉神社所蔵「上杉景勝宛明代割付」、仙台市博物館所蔵の明人書簡類、徳川美術館所蔵「永楽五年成祖勅書」、大阪歴史博物館所蔵「綾本墨書明王贈豊太閤冊封文」(誥命)、相国寺所蔵「紙本墨書明主勅書」について、熟覧調査を実施した。調査は、物理的計測(厚さ・重量、紙の場合は簀目・糸目・板目、織物の場合は織り方等)と光学的観察(繊維の種類・填料・密度)を組み合わせ、さらに繊維の写真を撮影するなど、成し得る限りの非破壊的な調査方法を駆使して総合的な見地から実施した。ただし、所蔵者の意向および資料の状態等により調査方法は資料ごとに若干異なっている。

一連の調査により、文書の料紙・料絹の素材、製造方法、使い分けなど、様式論や形態論の観点から中国の伝世古文書について新たな光を当てることができた。皇帝下達文書は、誥命には錦、勅書には三桎や楮などを原料とした樹皮紙が用いられているのに対し、同じ公文書でも割付などの官文書には竹紙が用いられている。これはすなわち、前近代中国の公文書において、発信者が異なれば使用素材も異なることを示している。また、中国の紙という一般に竹紙が想起されるが、竹紙は大量生産・大量消費としての紙の代表であり、樹皮紙とは質も格も異なるものだという事実も明らかとなった。文献資料から竹紙の評価は明代後期になってもさほど高くはないことは知られているが、文書の用途の点からみてもこの事実が裏付けられたと言える。このように本研究においては、これまで内容研究が中心であった中国古文書研究に、これまでに無い角度からの分析手段・方法を提案するとともに、様式や形態における基礎的なデータの集成を行い、今後の研究のための基盤を確立することができた。